

# 古放文

芥川龍之介

青空文庫



これは日比谷公園のベンチの下に落ちていた西洋紙に何枚かの  
 文ふみほご放古である。わたしはこの文放古を拾った時、わたし自身のポ  
 ケットから落ちたものとはばかり思っていた。が、後のちに出して見る  
 と、誰か若い女へよこした、やはり誰か若い女の手紙だったこと  
 を発見した。わたしのこう云う文放古に好奇心を感じたのは勿もちろ  
 論んである。のみならず偶然目についた箇所は余人は知らずわた  
 し自身には見逃しのならぬ一いちぎよう行いだった。――

「芥川龍之介と来た日には大莫迦おおぼかだわ。」！

わたしはある批評家の云ったように、わたしの「作家的完成を  
 棒かにふるほど懐疑かいぎてき的」である。就なかんずく中ちゆうわたし自身の愚には誰

よりも一層いっそう懷疑的である。「芥川龍之介と来た日には大莫迦おおおぼかだわ！」何と云うお転婆てんぱらしい放言であろう。わたしは心頭に発した怒火を一生懸命おこに抑えながら、とにかく一応いちおうは彼女の論拠に点検を加えようと決心した。下しもに掲かかげるのはこの文放古を一字も改めずに写したものである。

「……あたしの生活の退屈たいくつさ加減はお話にも何にもならないくらいよ。何しろ九州の片田舎かたいなかでしょう。芝居はなし、展覧会はなし、（あなたは春陽会しゅんようかいへいらしって？ 入いらしったら、今度知らせて頂戴ちようだい。わたしは何だか去年よりもずっと好よさそうな気がしているの）音楽会はなし、講演会はなし、どこへ行つて

見るつてところもない始末なのよ。おまけにこの市の智識階級は  
 やつと徳富蘆花程度なのね。きのうも女学校の時のお友達に会つ  
 たら、今時分やつと有島武郎を発見した話をするんじゃないの  
 ？ そりやあなた、情ないものよ。だからあたしも世間並みに、  
 裁縫さいほうをしたり、割烹かつぼうをやつたり、妹の使うオルガンを弾ひいた  
 り、一度読んだ本を読み返したり、家うちにばかりぼんやり暮らして  
 いるの。まああなたの言葉を借りればアンニユイそれ自身のよう  
 な生活だわね。

「それだけならばまだ好いでしよう。そこへまた時々親戚しんせきなど  
 から結婚問題を持って来るのよ。やれ県会議員の長男だとか、や  
 れ鉾山やま持ちの甥おいだとか、写真ばかりももう十枚ばかり見たわ。そ

うそう、その中には東京に出ている中川の息子の写真もあつてよ。いつかあなたに教えて上げたでしょう。あのカフェの女じよきゆう 給か何かと大学の中を歩いていて、——あいつも秀才とで通とおつていよ。好いい加減かげん人を莫迦ばかにしているじゃないの？ だからあたしはそう云つてやるのよ。『あたしも結婚しないとは云いません。けれども結婚する時には誰の評価を信頼するよりも先にあたし自身の評価を信頼します。その代りに将来の幸不幸はあたし一人責任を負いますから』って。

「けれどももう来年になれば、弟も商大を卒業するし、妹も女学校の四年になるでしょう。それやこれやを考えて見ると、あたし一人結婚しないってことはどうもちよつとむずかしいらしいの。

東京じゃそんなことは何でもないのでね。それをこの市じや理解もなしに、さも弟だの妹だのの結婚を邪魔じやまでもするために片づかずにいるように考えるんでしょう。そう云う悪わる口くちを云われるのはずいぶんあなた、たまらないものよ。

「そりやあたしはあなたのようにピアノを教えることも出来ないんだし、いずれは結婚するほかに仕かたのないことも知っているわ。けれどもどう云う男とでも結婚する訣わけには行ゆかないじゃないの？ それをこの市じや何かと云うと、『理想の高い』せいにしてしまうのよ。『理想の高い』！ 理想って言葉にさえ気の毒だわね。この市じや夫の候補者こうほしやのほかには理想って言葉を使わなごりつぱいんですもの。そのまた候補者の御立派なことつたら！ そりや

あなたに見せたいくらいよ。ちよつと一例を挙げて見ましようか？ 県会議員の長男は銀行か何かへ出ているのよ。それが大だいのピュリタンなの。ピュリタンなのは好いいけれども、お屠蘇とそも碌ろくに飲めない癖に、禁酒会の幹事をしているんですつて。もともと下戸げこに生まれたんなら、禁酒会へはいるのも可笑おかしいじやないの？

それでも御当人は大真面目おおまじめに禁酒演説えんぜつなんぞをやっているんですつて。

「もつとも候補者は一人残らず低能児ていのうじばかりつて訣わけでもないのよ。両親の一番気に入っている電燈会社の技師なんぞはとにかく教育のある青年らしいの。顔もちよつと見た所はクライスラアに似ているわね。この山本つて人は感心に社会問題の研究をしてい



るんですって。けれど芸術だの哲学だのには全然興味のない人なのよ。おまけに道楽はどうらく大弓だいきゆうと浪花節なにわぶしとだつて云うんじやないの？ それでもさすがに浪花節だけは好いい趣味じやないと思つていたんでしよう。あたしの前じや浪花節のなの字も云わずにすましていたの。ところがいつかあたしの蓄音機ちくおんきへガリ・クルチやカルソウをかけて聞かせたら、うっかり『虎丸とらまるはないんですか？』つてお里を露あらわしてしまつたのよ。まだもつと可笑おかしいのはあたしの家の二階うちへ上ると、最勝寺さいしようじの塔が見えるんでしよう。そのまた塔の霞の中に九輪くりんだけ光らせているところは与謝野よさの晶子あきこでも歌いそうなのよ。それを山本つて人の遊びに来た時に

『山本さん。塔が見えるでしよう？』つて教えてやったら、『あ

あ、見えます。何メエトルくらいありますかなあ』って真面目に首をひねっているの。低能児ていのうじじゃないって云ったけれども、芸術的にはまあ低能児だわね。

「そう云う点のわかつているのは文雄ふみおってあたしの従兄いとこなのよ。これは永井荷風ながいかふうだの谷崎潤一郎たにぎきじゆんいちろうだのを読んでいるの。けれども

少し話し合つて見ると、やっぱり田舎いなかの文学通だけにどこか

見当が違つているのね。たとえば「大菩薩峠だいぼさつとうげ」なんぞも一代

の傑作だと思つているのよ。そりやまだ好いにしても、評判の遊ゆ

蕩児うとうじと来ているんでしよう。そのために何でも父の話じゃ、禁き

治産んじさんか何かになりそうなんですって。だから両親もあたしの従

兄には候補者の資格を認めていないの。ただ従兄の父親だけは――

——つまりあたしの叔父おじだわね。叔父だけは嫁よめに貰もらいたいのよ。それも表向きには云われないものだから、内ない々あたしへ当あたつて見るんでしよう。そのまた言い草くさが好いいじやないの？ 『お前まへさんにも来て貰もらえりや、あいつの極ごく道どうもやみそうだから』ですつて親おやつてみんなそう云うものか知ら？ それにしてもずいぶん利己主義者だわね。つまり叔父の考えにすりや、あたしは主婦と云うよりも、従兄じゆうけいの遊蕩ゆうたうをやめさせる道具どうぐに使つかわれるだけなんですもの。ほんとうに惘あきれ返かえつてもものも云いわれないわ。

「こう云う結婚難けっこんがたの起おこるにつけても、しみじみあたしの考えることは日本の小説家の無力むりきさ加減かへんだわね。教育きよくうを受けた、向上こうじやうした、そのために教養きやうやうの乏ひそしい男おとこを夫つまに選ぶことは困難くわんなんになった、——

こう云う結婚難に遇あつてゐるのはきつとあたし一人ぎりじゃないわ。日本中どこにもいるはずだわ。けれども日本の小説家は誰もこう云う結婚難に悩んでゐる女性を書かないじゃないの？ ましてこう云う結婚難を解決する道を教えないじゃないの？ そりや結婚したくなければ、しないのに越したことはない訣わけだわね。それでも結婚しないとすれば、たといこの市まちにいるように莫迦ばか莫迦ばかしい非難は浴びないにしろ、自活だけは必要になつて来るでしょう。ところがあたしたちの受けてゐるのは自活えんに縁えんのない教育じゃないの？ あたしたちの習つた外国語じゃ家庭教師も勤つとまらないし、あたしたちの習つた編あみもの物ものじゃ下宿代も満足に払われはしないわ。するとやっぱり軽けい蔑べつする男と結婚するほかはないこと

になるわね。あたしはこれはありふれたようでも、ずいぶん大きい悲劇だと思うの。（実際またありふれているとすれば、それだけになおさら恐ろしいじゃないの？）名前は結婚つて云うけれども、ほんとうは売笑婦ばいしょうぶに身を売ると少しも変つてはいないと思うの。

「けれどもあなたはあたしと違って、立派に自活して行かれるんでしよう。そのくらい羨ましいうらやしいことはありはしないわ。いいえ、実はあなたどころじゃやないのよ。きのう母と買い物に行ったら、あたしよりも若い女が一人、邦文タイプライターを叩たたいていたの。あの人さえあたしに比べれば、どのくらい仕合せだろうと思つたりしたわ。そうそう、あなたは何よりもセンチメンタリズムが

嫌いだったわね。じゃもう詠歎えいたんはやめにして上げるわ。……

「それでも日本の小説家の無力さ加減だけは攻撃させて頂戴ちようだい。

あたしはこう云う結婚難を解決する道を求めながら、一度読んだ

本を読み返して見たの。けれどもあたしたちの代弁者だいべんしゃは謙うそのよ

うに一人もいないじゃないの？ 倉田百三くらたひやくぞう、菊池寛きくちかん、久米

正雄まさお、武者小路実篤むしやのこうじさねあつ、里見弴さとみとん、佐藤春夫さとうはるお、吉田絃二郎よしだげんじろう、

野上弥生のがみやよい、——一人残らず盲目めくらなのよ。そう云う人たちはまだ好

いとしても、芥川龍之介と来た日には大莫迦おおばかだわ。あなたは『六

の宮みやの姫君』って短篇を読んではいらっしやらなくって？ (作

者曰く、京伝三馬きょうでんさんばの伝統に忠実ならんと欲するわたしはこの

機会に広告を加えなければならぬ。『六の宮の姫君』は短篇集

『春服』に収められている。発行書肆は東京春陽堂である。作者はその短篇の中に意気地のないお姫様を罵っているの。まあ熱烈に意志しないものは罪人よりも卑しいと云うらしいのね。だって自活に縁のない教育を受けたあたしたちはどのくらい熱烈に意志したにしろ、実行する手段はないんでしよう。お姫様もきつとそうだったと思うわ。それを得意そうに罵つたりするのは作者の不見識を示すものじゃないの？ あたしはその短篇を読んだ時ほど、芥川龍之介を軽蔑したことはないわ。……」

この手紙を書いたどこかの女は一知半解のセンチメンタリストである。こう云う述懐をしてるよりも、タイプピストの

学校へはいるために駆落ちかけおを試みるに越したことはない。わたし  
 は大莫迦おおぼかと云われた代りに、勿論もちろん彼女を軽蔑した。しかしまた  
 何か同情に似た心もちを感じたのも事実である。彼女は不平を重  
 ねながら、しまいにはやはり電燈会社の技師か何かと結婚するで  
 であろう。結婚した後のちはいつのまにか世間せけん並みの細君に変わるであろ  
 う。浪花節ななわぶしにも耳を傾けるであろう。最勝寺さいしょうじの塔も忘れるで  
 であろう。豚ぶたのように子供を産みつけ——わたしは机ひきだしの抽斗ひきだしの  
 奥へばたりとこの文放古ふみほごを抛りこんだ。そこにはわたし自身の夢  
 も、古い何本かの手紙と一しよにそろそろもう色を黄ばませてい  
 る。……

(大正十三年四月)







# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 文放古

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>